駅前で出会った二人　ホテルへ　二人で濃密セックス

ここは東京。

夜になれば無数のネオンがせわしなく動く街を照らし、夜更けになっても街の動きは休まる気配はない。

そんな街の真ん中でとあるオフィスビルの書記をしているタカト。

学生時代に学んだ簿記の知識を活かし働こうという考えで社会人になった。しかし入ったのはだいぶブラック感漂う化粧品の販売会社。

見て見ぬふりをしているとはいえ、上部の経営者たちはそこそこ悪いこともしているようだ。

この日も自給分を働き、げっそりと痩せこけた頬でビルを出た。目の下には分厚いクマが出来ていた。

覚束ない足取りで駅へ行く。
駅前のターミナルでコンクリートの花壇の縁に腰かけた。

冬枯れで花弁の散ったプラタナスの木が寂しそうに空を見上げている。

１人の女性が近づいてきた。

タカトの横にゆっくりと腰かけた。

この時タカトは、手に小さなバイオリンを持っていた。

本当に疲れた時に弾きたい・・・・その想いだった。

駅前のコインロッカーを月払いで確保し、そこにいつでも弾けるように小さなバイオリンを置いていた。

バイオリンは学生時代に自分の意志で始めた。

だけどその意志の手前には、ギターをやってライブ活動をしている友人だったりとかあるいはテレビで見るクラシックの指揮者だったりとか・・・・身近な憧れからくる誘発があった。

道行く人は忙しく、いつも駅前で弾いていても足を止めてくれる人など皆無だ。
１人としていない。

でも、だからこそ気楽ではあった。

狭い自宅で小さな弓で弦を鳴らしてみても心寂しいだけだ。

ならば暗い夜空の下、人混みの中弾いてみる方が心が晴れやかになった。

（体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました）